

阿波おどり、伝統継承優先の「英断」も感染対策に穴 800人超感染

2022/9/23 毎日新聞



3年ぶりに屋外の演舞場に観客を入れて開催された、徳島市の阿波おどり

新型ウ

3年ぶりに新型コロナウイルス禍の行動制限のないお盆に行われた徳島市の阿波おどりで、踊り手ら800人超のコロナ感染が判明した。感染経路は不明で、徳島県はクラスター（感染者集団）とは認定していない。一方、踊り手らは屋外で観客を入れた演舞の復活に湧き、主催者側からは「今年開催しなければ伝統の継承が難しかった」との声が漏れる。

「（踊り手に）たくさん感染者が出たことが一番ショックだ」。主催者側の一人で徳島商工会議所会頭の寺内カツコ実行委員長は取材にこう吐露した。今年の阿波おどりは2020年、21年の中止や規模縮小を経て久々の本格開催となった。屋外の演舞場の収容率を約75%に抑え、消毒や換気など踊り手やスタッフらに向けた細やかなマニュアルも作成。感染防止対策を徹底したはずだった。

だが前夜祭を含めた8月11～15日の開催後に実行委が「連」と呼ばれる踊り手グループを対象に実施したアンケートで、参加した踊り手らのほぼ4人に1人に当たる819人の感染が判明した。

対策の穴はどこにあったのか。実行委員の一人で「天水連」の山田実連長は「控室が少し狭かったと感じた」と振り返る。マニュアル作成に携わった徳島大病院の医師は「（マニュアルが）徹底できていたか疑問が残る」と指摘。アンケートでも「控室の換気の徹底ができていなかった」「マスクやマウスシールドを着けていない連が多く見受けられた」などの回答があった。

県内の感染発表数は閉幕9日後の8月24日に過去最多となる3182人を記録。同15日時点で101人だった累計死者数は、9月22日時点で170人となった。飯泉嘉門知事や徳島市の内藤佐和子市長は阿波おどりが感染拡大の「主要因ではない」などと歯切れが悪

い。ただ「かつてない規模で感染拡大が進み、医療従事者が大きく影響を受け、負荷が生じた」（県保健福祉部）のは事実だ。

感染対策の面で課題が明るみに出た一方、コロナ禍での伝統継承を実現した側面はある。演舞を終えた踊り手は「3年ぶりにここ（演舞場）に帰ってこられた」と感無量の表情。観客も「久しぶりに見られてわくわくした」と喜んでいた。内藤市長も「（本格開催した）実行委の判断は英断だった」と言い切る。

市民が誇る阿波おどりを未来につなげるため、実行委は感染対策の検証を始めた。寺内委員長は「来年に向けて今から対策を練ることが必要だ。今年を土台に改善すべきところはしていく」と話した。（共同）